

学位論文の要旨

論文題目 ダウン症児の母親におけるリアリティショックに及ぼす影響過程の検討
Affecting Process of Reality Shock in Mothers of Children with Down Syndrome
広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号 D171903
氏名 上地 玲子

論文の要旨:

本論文は、ダウン症児の母親が経験するリアリティショック（以下、RS）の内容とそれを規定する要因とその影響過程を明らかにすることが目的である。

第1章では、障がい児の母親が抱える問題、RSに関する先行研究をレビューし、先行研究の限界や本論文の着眼点について述べた。母親は育児を通して親としての幸せを実感することができるものの育児ストレスを抱えることも少なくない。子どもに障がいがある場合、一般的な育児ストレスに加えて、さらに大きなストレスを抱えることになる。子どもが障がいを抱えているために、母親が想像していた子育てイメージが崩壊し、直面した現実との間に大きなギャップであるRSを実感することになる。しかも、子どもが成長していく過程において、同年齢の子どもの発達と比較することで、何度もリアリティショックを感じるようになる。本研究では、障がい児の中でも、知的な障がいを伴うことの多いダウン症児の母親を取り上げ、母親が抱きやすいストレスや問題についてレビューし、RSの観点から検討することの重要性を指摘した。

第2章（研究1）では、5歳から13歳までのダウン症児を持つ母親10名に対してインタビューを行い、ダウン症児の母親が経験するRSを測定する尺度（Reality Shock scale for Mothers who have a child with Down syndrome：以下、RSMD）で使用する候補となりうる項目を抽出した。逐語録をもとにカードを作成し、類似した内容を整理して106の項目候補に取りまとめた。さらに特定の保護者しか回答できない項目を除き、54項目を抽出し、9カテゴリーに分類した。ダウン症児の母親が経験するRSは、ネガティブなカテゴリーだけでなく、ポジティブなカテゴリーも含まれることがわかった。

第3章（研究2）では、研究1で抽出された項目をもとに、ダウン症児の母親が経験するRSMDの信頼性と妥当性について検討した。妥当性を検討するために、一般的な育児ストレスを測定する「育児ストレス尺度」（手島他, 2004）と障害児育児のストレスを測定する「発達障害児・者をもつ親のストレス尺度」（山根, 2013）を用いた。RSMDは6因子から構成され、「現実に対する困惑感」「子どもの発達上の問題」「障がい児の出産に対するショック」「将来の不安」はネガティブな側面であり、「前向きな気持ち」「家族の理解」はポジティブな側面であった。 α 係数は高く、十分な内的一貫性が認められたことから、本尺度の信頼

性は十分であると認められる。また、他の尺度の因子とも中程度の相関が得られたことから、本尺度の妥当性も確認できた。

第4章(研究3)では、規定要因及び反応における因子の下位因子の確定を行った。RSが生じる規定要因である4つの問題に含まれる下位因子を抽出した結果、子どもの問題は、「知的発達遅れ」「身体的発達遅れ」「健康悪化の可能性」の3因子から構成されていた。母親の問題は、楽観的な考え方である「楽観的展望」、信心に依拠する「信仰心」、障がい児である我が子を受容する「母性的かかわり」の3因子から構成されていた。家族の支援は、「夫の育児参加」と「祖父母からのサポート」の2因子から構成されていた。周囲からの支援は、母親の友人や知人との関わりである「友人知人との交流」因子、ダウン症児の母親からのサポートである「ピアサポート」因子、周囲にいる人から受ける差別的な関わりである「差別的な扱いによる傷つき」因子から構成されていた。RS後に生じる「ネガティブ反応」は、不安な気持ちや抑うつである「不安抑うつ」、心理的・身体的なストレスを感じる「ストレス」、子育てを楽しむ「満足感情」の3因子から構成されていることが分かった。

第5章(研究4)では、子どもの問題、母親の問題、家族の支援、周囲からの支援がRSの異なる下位因子と関連し、不安抑うつやストレス反応、満足感情に与える影響過程を検討した。その結果、子どもの問題では、主に知的や身体的な問題が母親のRSを引き起こし、ネガティブ反応に結びつくことがわかった。母親の問題では、母性的かかわりや楽観的展望がRSの現実に対する困惑感や障がい児の出産に対するショックを促進し、ネガティブ反応を増加させることがわかった。家族の支援については、夫の育児協力や祖父母の支援が前向きな気持ちや家族の理解を促進し、ネガティブな反応を抑制することがわかった。周囲からの支援では、友人・知人との交流やピアサポートは前向きな気持ちを促進するため、ダウン症児の母親にとって好ましい影響を与えているものの、周囲からの差別的な扱いが「現実に対する困惑感を促進し、直接的にまたは将来の不安を媒介してネガティブ反応を引き起こすことが明らかとなった。

第6章(研究5)では、ダウン症児を0～4歳、5～8歳、9～12歳の3つの年齢階層に分けて、測定指標の得点値および影響過程の年齢階層別比較を行った。規定要因、RS、反応の程度が年齢階層によって異なるかどうかを検討した。その結果、規定要因については、約半数の下位因子において年齢による違いがないことがわかった。RSにおいては、下位因子のうち「家族の理解」が低年齢において高く、それ以外は年齢による違いは認められなかった。反応においては、年齢階層による違いは認められなかった。年齢階層別にRSの影響過程の違いを検討した結果、年齢が低いうちは、子どもの問題は、知的発達や身体的発達遅れが不安抑うつやストレスを引き起こすが、年齢が上がると健康悪化の可能性が影響を与えることが分かった。母親の問題は、年齢の小さいうちは母性的かかわりの考え方が現実に対する困惑感や障がい児の出産に対するショックを抑制し、年齢が上がると、楽観的思考がネガティブ反応を抑制することが分かった。家族の支援は、年齢が小さいうちは夫の育児参加が前向きな気持ちを促進し、年齢が上がると祖父母からのサポートも大きな役割を示すよ

うになり、家族の理解や前向きな気持ちによってネガティブ反応を抑制することがわかった。周囲からの支援については、一貫してピアサポートが母親にとってネガティブな RS を軽減し、ネガティブ反応を抑制することがわかった。

第7章の総合考察においては、規定要因、RS、その反応に至る影響過程について考察を述べた。本研究で得られた知見をもとに、ダウン症児の母親の RS を緩和し、育児における心理的不安を軽減するためにどのような支援が必要となるのかを、子どもや母親に焦点を当てた提言を行った。最後に、本研究の限界と今後の課題について述べた。